

2-6. 与論島におけるアクティブ・ラーニング型の授業実践

小林善仁（人文学科多元地域文化コース）

石塚孔信（法経社会学科経済コース）

南直子（人文学科多元地域文化コース）

1. はじめに

「地理学実習」（人文地理学分野）では、春休みを利用して3月に4泊5日（船中2泊）の日程で滞在型野外実習を鹿児島県最南端の与論島（鹿児島県大島郡与論町）にて実施する。この実習では、行政をはじめ地域の諸団体（農協・漁協・観光協会など）に協力を依頼し、互いに連携して現地での調査を行うものである。なお、実習型の授業であるため、座学のような受動的な授業ではなく、学生が主体となり能動的に学ぶアクティブ・ラーニング型の授業に位置付けられる。

ある地域は、地形・気候・植生などの自然環境と経済・社会・歴史・文化などの人文的諸要素によって構成され、地域の中の自然・人文の諸要素が相互に関係し合いながら一つのシステムとして成り立っている。島嶼部という空間的にある程度閉鎖的な環境の地域は、地域を構成する諸要素の関係が比較的単純で、それらの関係からなる地域の総体を捉えるのに適している。

与論島巡検では、昨年度に調査した県本土の長島との比較を通じて、地域の仕組みや成り立ちの違いを把握し、理解することをもう一つの目的としている。具体的には、自然環境（地形・気候など）、人文環境（社会・経済など）の違いが、地域の成り立ちの違いや景観の差としてどのような現われているか、現地での観察や聞き取り調査などから明らかにする。その際、本土との距離、周辺島との関係など、島の地理的位置を踏まえて考察させる。

2. アクティブ・ラーニング型授業の実践例：与論島巡検

与論島は奄美群島の最南端に位置し、北の沖永良部島、南の沖縄本島との間に位置する。距離の上では沖縄本島の方が沖永良部島より近く、歴史的・文化的にも沖縄との繋がりを有している。その地理的位置から気候も温暖であり、年間の平均気温は21.6℃と亜熱帯性の気候に属し、周囲約23.7km・面積約20.6km²の島の全体は隆起珊瑚礁で形成されている。

温暖な気候とエメラルドグリーン色の海、亜熱帯性の植物などが観光資源となり、多くの観光客が与論島を訪れる。島の主要な産業はこれらの観光業（宿泊業など）と第一次産業であり、農業では南西諸島の基幹作物である砂糖黍の栽培に加え、畜産（肉用牛飼養）、輸送野菜（里芋・いんげん豆など）や花卉の栽培が盛んである。水産業では、漁獲漁業の他にモズク養殖も行われている。農産品や海産品を原材料とする工業としては、黒糖焼酎の醸造業と製糖（粗糖製造）、農産・水産加工がある。第一次・第二次製品の移出入には交通（船・飛行機）の視点が必須であり、産業に従事する人口の分野では、定住・移住に加え、関係人口の増加も地域的課題の一つである。島の生活を支える商店街での聞き取り調査も忘れてはならない（表参照）。

このように、人文地理学分野の調査範囲は幅広く、学生を二人一組の班に分け、班で一つのテーマを調査させる。その際、調査スケジュールの決定やアポ取りは各班で行い、聞き取り調査も学生が主体的に行う。

表. 与論島実習の日程 (案)

実施日	実施内容	備考
1 日目	移動	鹿児島新港～与論港
2 日目	全体巡検	自転車で島内一周
3 日目	グループ調査①	役場・JA・製糖工場など訪問
4 日目	グループ調査②	農家・観光協会など訪問
5 日目	移動	与論港～鹿児島新港

調査に際し、学生には自身の調査だけでなく他の調査テーマにも関心をもち、島の全体像のなかに自身のテーマを位置付け、他の分野・事象とも関連させて考えるよう指導している。これにより学生の視野は格段に広がる。

本稿を執筆している時点は、現地野外実習に出発する前の段階であり、実習の詳細を報告することはできないが、コロナ禍における野外実習の実施にあたり、感染症対策のために配慮する点を記しておく。

- ①野外実習での移動は、密を避けるためレンタカーではなく、主にレンタサイクルを用いる。地形が平坦かつ小規模な与論島だからこそ可能なことであるが、自転車で移動することにより土地の起伏などを直に感じこともできる。なお、鹿児島～与論島間の移動はフェリーを用い、途中の寄港地の島々の景観を船内から観察させる。
- ②宿泊については、地域の宿泊施設の事情を踏まえ、感染症対策を実施している宿泊施設を選ぶと共に、極力相部屋を避けるよう配慮する。また、朝夕の食事は時間をずらし、間隔を空けて着席させるなどして3密回避に努める。
- ③日中の実習は、野外で行うものが大半であるが、その際もマスク着用と手洗いなどを徹底する。屋内での聞き取り調査においては、マスク着用の着用はもとより、部屋の喚起を十分にし、少人数で聞き取りを行うなど3密を回避して調査を行う。
- ④夕食後の全体ミーティングは、広間やロビーなどで行い、マスク着用のうえ間隔を十分に保つ。この時、個別調査の成果を報告し、全体での共有を図る。
- ⑤調査終了直後や宿への帰着後など、場面の切り替わるときにも十分に注意し、玄関での手指消毒や手洗い、マスクの着用など基本的な感染症対策を継続的する。

3. おわりにかえて

本調査は当初、前年度の実施を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大などを踏まえ、調査地を長島へ変更した経緯がある。感染症対策を講じた実習を計画しているものの、実施時の状況がどのようになっているか、現時点では先行きを見通せない。臨機応変に事態に対応することが有事の際には求められるため、実習の延期など最悪の事態も想定したうえで、その際の対応策を幾つか用意しておくなど入念に準備をするより他にない。この点は、今後も続くコロナ禍での教室運営や授業においても同じである。